

赤城山の“すその”で暮らそう！ 前橋移住を考えるフリーペーパー

susono

vol.7

[2020.3]

まちに暮らし、森で遊ぶ。

前橋移住コンシェルジュは
あなたの夢を応援します。

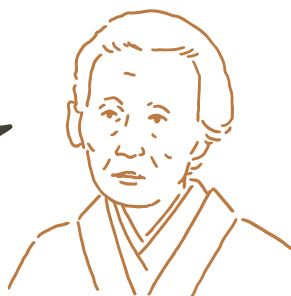
移住コンシェルジュ
鈴木正知



https://www.facebook.com/maebashijju/

Let's Learn 上州弁

そろそろ
行ってみる
かね



小淵 志ち
おふち しち

1847年、石井村（現・前橋市富士見町石井）に生まれ、若くして座繰り製糸の技術を身に付ける。夫の暴力から逃れるための旅先で、豊橋の住民に請われ当地に製糸技術を伝える。くず藩から生糸を紡ぎ出すことに成功し、三河地方の製糸業の発展に寄与した明治・大正期の女性起業家。

解説

上州人が「行ってみる」という時は、どこかに行ってみようと思っっているのではなく、「帰る」「帰る」という意味なのでご注意ください。「行ってみます」と言われて「行ってらっしゃい」と返したら怪訝な顔をされるかも。

歩いて帰ろう

吹く風の肌触りが ほのかに変わったような気がした 冬の午後
来る春に心を少し軽くして 今日はどこまで歩こうか



Instagram
@susono_maebashi

前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。
あなたに合った“前橋での働き方”が見えてくるかも！？

ハロー！WORK まえばし

リスナーと共に歩んできたラジオ局

株式会社エフエム群馬

1985年の開局から現在に至るまで、群馬県における唯一の県域 FM ラジオ局として多くのリスナーに親しまれているFM GUNMA。地方局には珍しく、バラエティや情報系の自主制作番組が充実しているのが特徴。

前橋市の中心商店街で開催される公開生放送イベント「前橋中心商店街ツナガリズム祭り」には毎年約2万人の来場者が訪れるなど地域との繋がりも深い。産休から復帰した女性アナウンサーを子育て世代向けの情報番組に起用するなどの取り組みもラジオ局ならではの。スマホやパソコンで聴取できるradikoの本配信がスタートした翌年の2011年にはいち早く参入。2022年には中心市街地への社屋移転も決定し、今後は更なるまちの活性化に取り組む。



協力 株式会社エフエム群馬
〒371-8533 群馬県前橋市若宮町 1-4-8 GN ビル

移住コンシェルジュ便り

☑️

勘違いしてほしくないのは「移住」は「目的」ではなく「手段」ということです。このことを忘れないでほしい。これまで乗ってきた移住相談の多くは、相談者が思い描いている夢や希望を実現するために「どこ（前橋に限らず）がいいのか？」「いつがいいのか？」を、しっかりと明確になるまで一緒に考えていくことを第一に進めてきた。ところが最近、移住そのものが目的化しているケースに出会うことが多くなった。

入手できる情報を丸呑みするケース。移住者の受け入れを積極的に広報する自治体（移住者に関する補助などの施策が豊富な自治体）の引き込みに乗って移住した結果地域に受け入れられていない、よそ者扱いされる、思い描いた暮らしと現実のギャップが大きい、など。原因は、目先の数字や一時的幸福感のために移住を目的化させているアナウンスにあると思う。そうならないためには、そもそも移住を考え始めた初めの一歩を、どれだけ引き出して、本

音を聞きだすことができるかどうか重要なポイント。これって意外と大変で難解な作業なんです。一つ言えることは、一発で希望通りの暮らしにはまることはほぼ無いってこと。そこで進めているのは「仮暮らし」戦法です。冒頭お話しした「どこ」と「いつ」をクリアしたら、実際に仮暮らしをしてみ、よりマッチする地域を暮らしながら見つけ出すんです。気の置けない仲間を暮らしの中から見つけ出し、本来の目的の実現と一緒に探しましょう。

鈴木正知（すずき まさと）

東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠イースタンキャンプ場管理人 インタープリーター担当などを経て、2006年に前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年から、前橋市の移住コンシェルジュに就任。



ユニーッ
U-29ピープル

をむすび屋ばかり
まどろしゅう
城所 周さん (22)

幼少期から父の転勤で、神奈川、大阪、栃木、福島、宮城を転々としてきました。大学進学でとなりの高崎市へ。卒業後はバイト先の飲食店で働くつもりで就職活動をしていなかったんですが、そのお店を辞めることになり悩んでいたところに、友人が群馬大学荒牧キャンパス近くの空き店舗を紹介してくれました。おむすび屋なら低資金でも開業できると考えて、準備のため、半年前に前橋市に移住。内装は県内の大学生と自分たちの手でリノベーションしました。オープン当初は学生のお客さんがほとんどでしたが、最近は近所の方も家族で立ち寄ってくれるようになりました。今後は学生たちが商品開発や広報などに積極的に関われるようなお店にしていきたいと思っています。

めぶく 〇 前橋市

SUSONO vol.7

発行日：令和2年3月6日

発行：前橋市役所 政策部 未来の芽創造課

〒371-8601 群馬県前橋市大手町二丁目12-1 TEL 027-898-6513 FAX 027-224-3003

プレイフォレスト 遊びの森キャンプ場

群馬県前橋市粕川町室沢



前橋市粕川町にある木の実幼稚園が教育活動の一環として運営する森の中の遊び場。広大な敷地の中には、自然の地形と樹木を利用したアスレチック施設、焚き火場やクラフトコーナーなど、親子で自然体験ができる施設が充実している。あえて禁止事項を設けず、子どもたちが自分で考え遊ぶことを促す。毎月第2・第4日曜日に開放している。

島田さんのおすすめ

らーめんばる ととや

群馬県前橋市五代町 486-1



あっさりとした中にも豊かな風味とコクを感じるスープに、ロードで鰹節を炒めて作る「カツオ油」をかけた看板メニューの「ととやめん」。代替わりを機に上泉町から移転した新店舗はバリアフリーの構造になっていて家族連れにも人気。地元が九州で細麺にこだわりのある恵子さんもお気に入りの店で、家族でよく訪れるそう。



**山に囲まれた景色が
都会の疲れを癒してくれた**

妻の恵子さん（40）とは京都の大学で出会った。卒業後、恵子さんは一度鹿児島の実家に戻ったが、遠距離恋愛の末に結婚。二人は川崎で暮らし始めた。

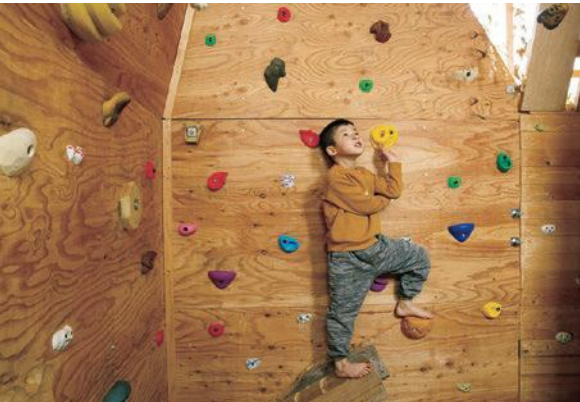
「最初はお正月とか夏休みに一緒に前橋

**自然の中で育まれる
これからの家族のかたち**

「妻も鹿児島出身で田舎育ちだったので、都会で子育てというのはお互い考えづらかった。前橋は子どもの医療費が中学卒業まで無料ですし、幼稚園も自然派でのびのび遊ばせてくれるのは、地方ならで



田伊裏に火を起こす岳彦さんの母・ひろみさん。書道の腕前は観光ボスターに採用されるほど。



手作りのボルダリング小屋で遊ぶ千太郎くん。のびのびとした環境で、子どもたちは自分で考えながら楽しみを見つけていく。

尾瀬に行ったりとか、軽いハイキングをしていますね。子どもも連れて行きます。父は今でもガンガン登っているんですけど、自分は登頂とかにはこだわらないです。キャンプの延長みたいな感じで、山の空間が好きですね」

恵子さんの故郷の鹿児島も桜島がシンボルだ。どこか似ている部分があるのかもしれない。

「最初の頃は、前橋から見える山のどれが赤城山で、妙義山で、榛名山かって、全然覚えられなかったんですけど、訪れるうちにそれもだんだん分かるようになって。山を覚えることでちょっとずつ群馬を知っていくような感じがありましたね。移住した当初は鹿児島の母が野菜を送ってくれていたんですが、前橋に来てこっちの野菜を食べた時に、『こんなに野菜が安くて美味しいならもう送らなくていいね』って」

少し長めの通勤時間が オンとオフを切り替えてくれる

「今の職場は新宿で、ゲーム制作会社でキャラクターや背景のデザインをしています。新幹線で通勤していますが、自宅からは2時間ちょっとですね。10年くらいこの通勤スタイルなのでもう慣れました。休みの日に都会に出かけるとなると

「もともと地元が前橋なんですけど、群馬を離れて京都の大学に進学して、卒業後は川崎の会社に就職しました。その間に父がこの場所に別宅を作り始めて、『自分たちは将来的にはこっちに移住するから実家のほうに住まないか』と言われていたんです。両親の年齢的なこともあって、最終的には完全に引越すのではなく、両親のために実家の隣にもう一軒家を建ててそこに住むことになりました。10年ほど前から、そこで平日を過ごし、週末は中之沢で過ごしています」

赤城山の南面を麓へと流れる粕川。その名前の由来は、室町時代からこの地域に伝わる伝説行事で白酒を川に流す神事にちなんだものと言われる。その粕川に沿って南北に広がるのが粕川町（旧・粕川村。中でも中之沢地区は赤城山の中腹にあり、ナチュラルチーズを製造する酪農家の「スリーフrawn」や、私設美術館である「中之沢美術館」などが点在するのどかなエリアだ。平日は前橋市内の平野部にある自宅から都心へ通い、週末はこのエリアにある別邸で過ごすという島田岳彦さん（41）一家を訪ね、J R前橋駅から車を走らせること40分程。高原の別荘地のような趣きの静かな林道を抜けたところに、島田さん一家が週末を楽しむ別邸はあった。



ちよつと億劫な気がするんですけど、平日はその生活がルーティン化しているの、特に苦ではないです。自分のプライベートの時間が強制的に確保できるので、本を読んだり動画を見たり、ゲームを楽しんだりしています。通勤時間の長さはオンとオフを切り替えるのにかえってちよつどいいですね。それよりは、週末に広々とした田舎で暮らせるメリットのほうが大きいかなと思っています」

取材中、長男の千太郎くん（7）と次男の久弥くん（4）は、1月の寒空の下にもかかわらず敷地を駆け回って遊んでいた。子どもが探検するには十分な広さだ。母屋の脇に伸びる小道にはシャクナゲや椿の若木が植えられている一方、地面には自生する木々から落ちてきたドングリや松ぼっくりが転がっている。まさに自然と人が共存する空間だ。一方で、岳彦さんのゲームデザイナーという職業と山小屋という環境にはギャップも感じる。

「父が登山好きで、自分も3歳くらいの頃から父に担がれて山に登っていたんです。高校の頃までは家族で山に登って、自分でも大学でワンダーフォーゲル部に所属していました。社会人になってからはあまり登らなくなりましたが、家族で

家族で作る、

親子三代の憩いの場。

